
とある憑依の死亡運命

駱駝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある憑依の死亡運命

【著者名】

ZZード

ZZ9559Z

【作者名】

駱驼

【あらすじ】

死亡運命【Death flag】

それは、決められた道筋。

全ての終点。

垣根帝督と「」が交差する時、物語は始まる。

機械的なアラーム音が鳴っていた。
ああ、うるさい。

頭に響く

.....

布団から腕を伸ばして、真上のどけたにある田舎まし時計を探して、音を止める。

「たむ」

布団を深く被り直す。もう1ヶ月も終わりに近づいているからか、最近ますます朝起きるのがつらく感じる。だが今日は月曜日。昼まで寝放題の休日ではない。学校が新たに始まる日だ。面倒ではあるが、起きなくてはならない。

田覚まし時計を取つて時間を確認すると、時刻は7時10分前。頑張れば、後10くらいは寝れないこともないけど、そうすると電車に乗り遅れるような微妙な時間だった。

「……起れるか」

掛け布団を除けて、ベットから出る。

「ああ……いてえ」

低血圧のせいか、寝起きだと酷く痛むそれが煩わしい。顔でも洗つてすつきつしようと、いつものように洗面所へ向かう。

「あ？」

が、なにかがおかしいことに気が付いた。俺の家では、部屋を出て右に行つた奥にそれがある。けど、そこにあつたのは洗面所ではなかつた。

「どうだ？ 此処……」

「どうか、俺の家でもなかつた。そこは見覚えのない部屋で、友人の家でもないし他の知り合いの家でもない。知らない天井ならぬ知らない部屋であつた。

「はあ？」

他人の家で寝てしまつたのだろうか。そんなことをぶんやりと思つたが、昨日は自分の部屋で寝たという記憶がそれを否定する。じやあなんだ。俺が寝ている間に誰かがこの場所に連れてきたのか。

「あー」

寝起きのせいか頭が回転しない。俺は昨日、自分の部屋のベットで寝た。これだけは、確か。なのに、なんでこんな場所で。

考える。すつきまで寝ていた部屋のベットや目覚ましに違和感は感じなかつた。だけど、よく見ていたわけではないので見間違いという可能性もある。なら、あれも俺の部屋ではなく別の場所という

ことだらうか。

部屋を出て、廊下に出る。見ると、そこは俺の家ではなかつた。微妙に似てゐるんだけど、少し違う。構造や壁の色とか似ていて、ころもある。けれど、違う。ここは俺の家ではない。なんで気付かなかつたんだ？ こんなにも違つたのに……。

薄氣味悪い何かを感じながら先程まで居た部屋のドアを開ける。そこには、いつも通りの俺の部屋が

「……」

無かつた。

成程。どうやら俺は、自分の知らない部屋で寝ていたらしい。ズキズキと痛む頭を押さえながら、部屋を見渡す。

その場所は、目覚まし時計の配置場所やベッドの置いてある位置、布団の色こそ同じものであつたが、それ以外は全く別な物であつた。机も無いし、壁に貼つてあつたジェラードのポスターも無い。お気に入りのコンポも無ければ、パソコンも無い。何もない部屋だ。

ベッドの向こう側にあるカーテンを開ける。

やはりというべきか。今更というべきか。窓を境にして見える外の景色は、昨日までと全く違つていた。

「……」

カーテンを閉めて、近くにあつたベッドに座る。

分からぬ。一体俺に何が起こつてゐるんだ？ 昨日は確かに自室のベッドで寝た筈なのに、なんでこんな場所にいるんだ？

渇巻く疑問。今更ながらこの事態に少しの恐怖を感じた俺は、頭の中で落ち着けと自分に言い聞かせながらこの事態を解決する術を考え始めようとして

「え？」

自分の来ている服が変わっていることに気付いた。俺は寝間着用のジャージを着てたの筈なのに、何故か紅紫色の学生服に似た物を着ていたのだ。

……もう、なんなんだよ。本当に。おかしい。何か変だ。こんなこと有り得ないだろ。普通じゃない。何がどうなってるんだ。

「ん？」

紅紫色のジャケットのポケットに何か入っていた。中に入っているものを取り出す。

「財布と携帯？」

出てきたのは、黒い財布と同じく黒い色をした携帯電話。俺の物ではない。別の誰か物だ。この服を俺に着せた別の誰かの。もしかして、安っぽい推理小説とかによくあるみたいに、これに何かの手掛けりがあつたりするのだろうか。

財布を開いてみる。

入っていたのは、お札やらカードやら。まあ、見た目的には普通のカードと変わらないものだが、その中にはみ出ているカードに、上部分に学生証という文字が書いてあるのが見えた。

当然、俺の物ではない。だとしたら、これはそういうことなんだ

らうか。そのカードを抜き取って、確認する。

「垣根提督？」

それは垣根帝督という人物の学生証であった。しかも、“長点上機学園”のだ。証明写真として写っている人物はどこかホストのようなやくざのような顔の茶髪の青年で、とある魔術の禁書目録という言葉が脳裏に浮かぶ。

そう、これはあの垣根帝督だ。勘違い等ではない。一度イラストで見た時のイメージをそのまま三次元に具現化したような顔。間違いなく、本人だ。偶然名前が同じだけの顔が似ている別人といつのには、彼は垣根帝督に似過ぎているし、長上点機という学校名が現実に存在するわけがない。

それら考へても、これはとある魔術の禁書目録のグッズか何かといふ考へが正解だろう。

なら、問題はその先だ。どうして、財布にそのような紛らわしい物を入れているか。

財布にある他のカードを抜け取る。

「……っ」

それは、いや、それも垣根提督の名前が入った銀行のカードだった。

おいおい、流石にこれは笑えないって。何の冗談なんだ。

他のカードも手に取つて確かめるが、全て同じ名前だ。中には垣根帝督の写真が貼つてあるカードもある。

これらは全てグッズだというのか。

いや、そんな筈は。

そんな意味の無いことをして、何の得になる。

俺を驚かす為？ それこそ、まさかだ。ありえない。

でも、なら何故？ この財布に入っている気味の悪いカードはどんな経緯があつて財布に入っている。

本物か偽物か見分けのつかないクオリティの高さからして、ただの垣根帝督ファンがやつたというのには到底思えない。

「まさか」

馬鹿な妄想が頭を過る。そんなこと、ある筈ないのに。

携帯電話をポケットから出す。

取り合えずはこちらが先だ。

折り重なる部分を開く。現れたのは、真っ暗になつてている液晶の画面。電源が入っていないのか、数秒間待つても灯りが付かない。電源ボタンを押して、それを起動させる。

機械的な音と共に表示されていく画面。10秒程待つと、始めによく設定されている果物の画像が出てきた。

相変わらず、そういう所は普通なのか。一見何の違和感も感じないような仕様に少し辟易する。まあ、いい。先ずは電話帳を確認しよ

「なつ」

うとして、信じられないが俺の手に写つた。携帯に真ん中より少し上辺りに表示されている日付。それは、4月21日火曜日と記されていた。

そんな、馬鹿な。今日は11月29日の筈だ。なんで4月21日なんだ？ 携帯の間違いか？

さつきの財布といい、なんなんだよつ。これはつ。

「つ」

いや、落ち着け。

冷静になれ。

まだだ。

電話帳を開いて、この携帯電話の持ち主であろう人物の名前を調べる。

そこにあったのは、やはり“垣根帝督”といつ名前。まさか、本当に。

髪の長さに感じていた違和感。それは、気のせいじゃ……ない?

嫌な予感がする。

部屋を出て、洗面所に行く。一回ドアを開けるとそれはあつた。

な、んだ、これ……。

鏡に写る人の姿。

それは俺ではなく、学生証で見た茶髪の青年だった。

……ああ、そうか。そういうことだったのか。

確かにそれならば理解は出来ないが、納得は出来るかもしないな。

鏡に写る俺。

それは、垣根帝督で。

垣根帝督と俺。

それらは、いつの間にか交差していたらしい。

自身の姿が垣根帝督であつたことを鏡で確認した俺は、この家で一番広い部屋であるリビングのソファーに座つて考えていた。

憑依。二次創作とかによくあるパターンの異世界へのトリップを指す言葉だ。他にも、転生・召喚・来訪と色々あるが、知らない間に別の場所にいたことや自分の姿が物語の登場人物になつていたことを考慮すると、恐らく今の事態は「憑依」であると判断出来る。実は俺以外にも垣根帝督がいて、これが垣根帝督の姿に変わっただけの来訪という選択肢もないわけではない。が、財布にあつたカードや携帯のアドレス帳から考えるとその可能性は極めて低いだろう。

部屋にあつたノートパソコンで、学園都市に関する情報を調べる。今が“4月21日”であることは、携帯電話の日付で分かつたが、それが何年の“4月21日”なのかは分からなかつた。

携帯電話の画面には、 $20 \times \times$ 年であると表示されていたものの、そもそも魔術と科学が交差した年が西暦何年なのか分からぬから意味ない。

果たして、今は物語が始まる前なのか後なのか。

美坂美琴、超能力者（レベル5）第三位。能力名、超電磁砲。そして

「常磐台付属中学校所属の一年生か」

バンクに表示されている画面を見る。そこには、表向き（・・・）の情報として超電磁砲の能力説明、そして所属学校が記されていた。学園都市で最も有名な超能力者である彼女は、確かに物語が始まる時には中学一年だった筈だ。なら、必然的に今は魔術と科学が交差

する約三ヶ月前といつことになる。

運が良かつた。

これなら、未だ死亡フラグは立っていない。

「ふー」

軽く息を吐いて、ソファーに凭れかかる。
正直な話、俺はこれが夢なんかじゃないかつて未だ思っている。
当然だ。いくら状況証拠が揃っていても、そんな簡単に自分が小説の世界にてましてやその登場人物になつてているだなんて思える筈がない。

だが、今の俺にはそんなことを考える余裕がないことも事実だ。
何故なら垣根帝督は……。
いや、止めよ。そんなエフの未来を考えても仕がない。重要なのは現在だ。

パソコンで、学園都市の地理を調べる。

垣根帝督が学園都市について何も知らないといつのは不味い。せめて、地理くらいは知つておかないと。

現在地を検索にかけると……出た。第七学区。俺の居るマンションは、第七学区の住宅街にあるらしい。
近くの施設を調べてみる。

常盤台中学校学生寮等がある学舎の園、教員向け高級マンションのファミリーサイドがあつた。……そうか。此処は上条当麻の居る学区だったのか。

嫌な偶然だな。垣根帝督と彼らを交差させたいといつ誰かの意志を感じてならない。

「……って何を考えてるんだ」

論理的じゃない。そんな考えは。

きっと精神が不安定になつていいのだらう。自分で落ち着いていると思つていたが、案外そうでもなかつたようだ。

ノートパソコンの電源を切つて、再びソファーに凭れかかる。

「はあ」

窓から外の眺めれば、相変わらずの知らない景色がそこについた。学園都市。とある魔術の禁書目録の舞台。此処は小説の中であつて現実じゃない。なら、少しくらい楽しんでみるのも良いかもしれない。どうせ、これが夢か現実か俺には区別が付かないんだし。

靴を履いて、部屋から出る。

確かに少し歩いたところに、公園があつた筈。そこに行つてみよう。先程頭に入れた地図を思い出しながら、階段を降りる。

にしても……暑いな。

これで昨日までは手袋して学校に行つていたのだから、全く意味が分からぬよ。何もかも。

公園に行くと、平日の午後にしては人が多く、焼きそばやクレープの屋台等で何組かの学生が列を作っていた。

今日は半日なのだろうか？ だとしたら学校帰りにでも寄つていのつかな。小説の世界なのに、現実みたいで面白い。

漂つてくるいい匂いに連れられて、店の近くにまで寄る。美味そうだ。時間帯的にも丁度良いから、ここで何か食べてこいつか。朝起きてから未だ何も食べてなくて、腹減つてゐるし。

空いている方の列の最後に並ぶ。車の横に置いてあるメニュー表を見ると、豊富な品揃えで値段も安い。流石に学生の住む都市なだけはある。競争率が高いから、本当に良いものしか残らないんだろうな。

「チョコ&バナナ一つ」

「はい、480円です」

クレープを買って、公園にあるベンチに座つて食べる。

基本甘い物はコーヒーと一緒にないと口に甘味が広がるのが嫌で食べれないんだが、クレープとチーズケーキだけは昔から別だった。

甘味がくどくないというか、大丈夫な甘さというか。上手く言葉では表せないけど、俺の好きな味であることは確かだ。

うめえ。

やっぱチョコ×バナナは鉄板だよな。アイスクリームでいえばバ

二ラ、ラーメンでいえば塩味のよつこ、元氣からある組合せに外れない。

過去に食べたクレープと比較しても、これはトップクラスの味であつた。そんな風に、評論家のように内心で作品の批評をしていると

「 プル　プル　プル　プル　」

突然携帯電話が鳴り出した。

「うおっ、びっくりした。そういうや携帯持つてたんだつた。自分のじゃないから、すっかり忘れてたよ。

クレープを持つていない方の手で携帯電話を取り出す。親指を引っ掛けるようにして上部分を持ち上げて画面を見ると、非通知と表示されていた。

あー、どうすれば。今は俺が垣根帝督だから、出なきゃいけないんだろうか。非通知ってなんか嫌な予感がするんだけど。

「 プル　プル　」

少し迷つてから、電話を取る。どのみち俺が垣根帝督である限り、いずれくる問題だ。なら早い内に片付けおいた方が良い。

「あー、もしもし」

「遅い。私が君に電話を掛けてから既に30秒以上経つていい。もつと早く出られなかつたのかね」

電話を掛けてきたのは、やたらと神経質そうな喋り方をした奴だつた。
なんだこいつ？

仮にも学園都市第一位の垣根帝督に対して、なんでこんなに偉そうな態度なんだろう。もしかして、上か？

「悪い。こっちも色々あつてな。で、用件は？」

不信感を持たれないようこ、垣根帝督っぽい口調で話す。知り合いに変な疑惑を掛けられると後が面倒だから。

「スクールの本拠地が変更になった。詳しくは地図をメールで送るからそちらで確認してくれ」

その言葉と共に電話が切れ、メールの着信音が鳴った。早つ。

受信したメールを見る。

そこには、第七学区2 13番と記されていた。

近いな。地図を見る限りでは、此処からそんなに離れていない距離である。

他にやることもないし、ちょっと行ってみるか。

俺はクレープの包み紙をゴミ箱に捨てて、公園を出た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9559z/>

とある憑依の死亡運命

2011年12月31日17時51分発行